

竹内吉正が社会福祉法人神愛会を 退職した経緯と思想展開の考察

中 畠 洋

I. はじめに

社会福祉史における宗教思想のとり扱いについては、「社会福祉の正確な歴史的地位を定め、その理論に誤りのないことを期するのが、社会科学や社会福祉を内面から支える思想や宗教の任務である」などと指摘されて既に久しい(吉田 2003:1)。とりわけ、わが国でも仏教福祉思想史やキリスト教福祉思想史などの類いの先行研究に恵まれ(日本基督教社会福祉学会・日本基督教社会事業同盟編 1978; 池田・芹川・長谷川編 1999; 日本仏教社会福祉学会編 2006; 浄土宗総合研究所仏教福祉研究会編 2012; 宮城 2013; 日本キリスト教社会福祉学会編 2014 など)、辞典の類や個人研究を中心に論考されているものの、すべてが網羅されているわけではない。

例えば、その一つに、ホームヘルプ事業史とキリスト教との関連が挙げられ、家庭養護婦派遣事業の発展に尽力した竹内吉正(1921.1.15-2008.12.14, 以下、竹内)が古希を迎えようとしていた頃に勤務していた宗教法人神愛修女会内に属する社会福祉法人神愛会勤務時の彼の思想や役割がある。1年7ヶ月間という短い期間における勤務経験ではあったものの、そこでの彼は何を思索し、それをどう表現し、実践につなげようとしたのか。あるいはまた、同会退任前後や帰郷後の1991(平成3)年8月5日に社会福祉法人小諸学舎理事長に就任するまでの間に、いかなる生活体験や熟慮・検討を行っていたのか。

「社会福祉の後発国として、日本社会福祉は明治以降つねに『モデル』
 がある種の『目的概念』で追求してきた。しかしこの『モデル』は『社会』
 の現実や『生きた人間』を離れては国民生活に定着しようがない」などと
 いう吉田(2003:9)に立脚すれば、宗教的な基盤を背景とした竹内が果た
 し得た役割や功労を注視し、そこから意図される方向性や示唆を汲み取る
 ことは、実際に生きた生活者を草の根レベルで把握し直すことでもあるた
 め、重要であると考え。

そこで本稿では、まず、竹内直筆の2冊の日誌〔『3Year Desk Diary
 1988-1990』(1988年1月1日～1990年12月31日、本稿では日誌Iとする)、
 『1991-1993 THREE YEARS DIARY』(1991年1月1日～1993年12月
 31日、本稿では日誌Jとする)]を紐解きながら、神愛会退職前後の彼の
 動きを捉え直す。次いで、この頃の竹内は執筆活動や自省などを入念に行っ
 ているため、長野県ホームヘルパー協会20周年記念誌への寄稿や郷土・
 宗教史研究という視点から、長年携わってきたホームヘルプ事業を竹内な
 りにどのように総括しようとしていたのか、あるいはまた、歴史と教育と
 の関連をどう思考しようとしていたのかに迫る。その上で、『山田分館報』
 や『一羔^{いちこう}ニュース』の編集、講演活動、老人大学(老人学園、高齢者学級)、
 社会福祉トップセミナーなどを通じ、彼がいかにして思索を深め、社会改
 変・生活向上のための知見や知恵を逡巡していたのかについて具体的に明
 らかにする。

なお、倫理的配慮としては、竹内関連史料の引用並びに研究の範囲内
 の公表の許可を彼の実兄、花里吉見氏から得た(2009年10月3日)。また、
 筆者の所属校の研究倫理審査委員会から承認を得た(中京研倫第2019-007
 号、2019年7月17日承認)。

Ⅱ. 社会福祉法人神愛会退職の経緯及び施設奉仕的関わり

(1) 神愛会での膠着状態と退職挨拶

神愛会に在勤していた時の竹内の肩書は事務長であり、のちに広報委員としても幅広く活躍しているが、66歳から勤めた同会では、「入居者の多くが思い思いの奉仕に参加、前述のサークル活動を指導し、コーヒープレイクを促し、同僚老人との交流を幅広く展開、『ステパノ館』を最大限に活用していた」などと(竹内 1996b:18)、その一側面を述懐している。しかしながら反面、元号が昭和から平成に変わって間もない1989(平成元年)1月20日には次のように記し、同会での勤務がもはや彼にとっては極限に達しようとしていた。

理事長の業績内容を取りまとめる内申書の作成を急ぎ、県事務所民生課長あてに提出する。山本事務員が純粹に運転して吾を便乗。その頃の雨足は正に猛烈を極める。昨夜の風呂がたたったか、風邪気味と喉に上がってきた感あり。無理をさける。夜警勤務のネットワークについて、理事長と協議し合う。理事長の全体的事務上の配慮と調整力に限界あることを痛感する。いまだ浜野園長は退院なくそれなりに心くばりして経営の万全を期する。(日誌Ⅰ:1989年1月20日)

上記から、体調不良とともに、理事長を通じ、同会の限界を悟っていた竹内は、その後、即決し、一旦は1988(昭和63)年度末をもって同会を退職する決意を固める。その際、いかなる苦難があったのかということや、具体的に相談した相手までは詳らかではないが、この時の彼の心情を示唆するものとして、関係各位に送付した葉書文書が残されており、注目される。

謹啓 陽春とは申すものの時に不順な寒さも、忘れた頃にめぐり来る
昨今、お障りなくお過ごしでしょうか。お伺い申し上げます。この度、

日本聖公会神愛修女会が営む社会福祉事業にかかわりをもち、ほぼ三年を経過しましたが、この間、特別養護老人ホームを中心とした特定有料老人ホームの新設、地域交流ホームの改築と、その運営などに力を注いでまいりましたが、概ねその軌道が整えられたのを機会に、退任させていただくことになりました。何分とも遠路の単身赴任にて、この間、皆さまがたのご加護ご厚情に甘えつつ、今日に至りましたことを思い巡らし、心からお礼申し上げる次第です。繁忙にすぎたこの三年を顧みて、いましばらくは家庭での静かな時を大切にしたいと心しております。

末筆ではございますが、いよいよご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます略儀ながら御礼、ご挨拶申し上げます。敬具 一九八九年四月 竹内吉正（日誌I：1989年4月30日付の日誌に添付されていた葉書、傍点筆者）

つまり、こうした第一次史料を紐解くと、竹内の退職理由が、単なる同会への悲観や理事長への失望といったもののみならず、有料老人ホームの新設や地域交流ホームの改築など、時勢や社会的ニーズを鑑みながら、ある一定程度の成果を彼なりに挙げ得た安堵感にも似た感情にも起因していたことが分かる。加えて、和歌山県という不慣れな地域での単身赴任にも少なからず疲弊していたことが推察される。なお、実際には数多くの説得から、こうした決意を翻し、いましばらく同会に尽くしたのち、一連の貴重な経験を経て、彼は再び故郷の長野県上田市へと戻り、復活の時機を模索していくことになる¹⁾。それでは、これまで主に高齢者福祉分野の興隆や同会の発展に尽力していた竹内は、その後どのように思索を巡らせ、いかなる舵取りをしていくことになったのかを以下に見ていこう。

(2) 教会委員会での提言と施設奉仕の関わり

一連の彼の日誌から、帰郷後の竹内は、すぐさま定職に就くことはなかったようで、約2年余りの間、身近な職務に加え、上田聖ミカエル及び諸天

使教会（日本聖公会）会員としての活動や地元民としての安定した日常生活を送っている。そのことが端的に表れるのが、1990（平成2）年1月21日の日誌の記述である。ここでは、「晴、大寒らしい冷気が朝から覚える日和。妻、部落の新年会に、吾は教会礼拝と新年信徒総会に参加のため上田に下る。信徒総会での意見として教会委員会に提言する」などとあるように（日誌Ⅰ：1990年1月21日²⁾）、信徒総会の教会委員会での論議に参加し、①教会掲示板破損事件について、司祭だけの責任でなく教会全体の問題として把握し対策すべき課題であることを認識したい。そのための教会委員会の至急検討を要請したい、②高齢者の脚が痛むとき、礼拝形式を立ったままの聖餐にあずかるか、座位のままの礼拝を許されたい。それと合わせて階段をスロープにする配慮をしてほしい。これも亦教会委員会の検討をはかってほしいことを要請した、の2点を竹内は断固主張している（同）。ここから、高齢期に入っていた竹内が、高齢者側の立場からも熟慮を行っていたことが注目される。

一方、施設奉仕のかかわりのなかで、その存在意義を問われた別日には、①処遇領域で指導助言を職員集団に行った。また継続中であること、②施設側として最も不安感を抱いた痴呆老人に対して定着した対応技術を職員集団に行った。また継続中であることの2点を指摘し（同：7月31日）、ここでは、職員の資質向上並びに痴呆性老人（現、認知症高齢者）への対応を焦眉の課題と認識している。その上で、彼は以下のように論及しているが、それらの実現は案外難しく、様々な配慮や構想が求められるため、その実現化のために苦慮することになる。

所長、理事長、事務長という“家族集団”が、書面を巡回覧決裁を得るということなく、提言、進言が受容されない現状である。新規施設を支える力として吾が立場の参加があった経過があるので、その点を考究するならば、即時退去する決意をしたこともあった。更に公的機関からの法人運営に関する指摘はきびしい。その改善について進言も通じな

い。当然指摘されるべくして指摘される現状にあると云っても過言ではない。しかし50名の措置者が現在存在し、若い職員集団そのスタッフは、吾と一身同体的師弟関係にあるなかで、即断的退去は吾としてなすべきではなく、少なくとも職員集団として基本的力量が発揮できるまでは、いましばらく忍耐強く、その力量を体験的に定着させることの必要があると思う。また、その基本的姿勢を伝承し、力強く歩む姿を見届けたとき、勇んで退くことが最善であろうと考える。もし許されることならば、その若い力量が基本的法人の構築に役割を果たし又見直す機会を造成することの必要性を痛感したりする。今日一日は以上の諸件を反復し、反芻しつつ結論を見出そうとする模索の一日であったかも知れない。そんな結論を大日方点緒氏や宮下課長（市）中島課長補佐（郡）にも打ち明かしておく必要性も思い巡らしたりする。以上（日誌I：1990年7月31日、傍点筆者）

上記から、竹内は本音としての「即時退去」の気持ちを抑制しつつ、実際には退去前に様々なことを思案していたことが認識でき、「基本的姿勢を伝承し、力強く歩む姿を見届けたとき、勇んで退くことが最善であろう」との熟考から（同）、こうした試行錯誤や苦悩体験を重ねた竹内は、後進の育成や伝承者の成長を念願していたと認められる。但し、ここでは、ただ単に、職場の人間関係や現場の雰囲気などといった表象的レベルの問題や困り事といった範囲とは異なり、より大枠で物事を捉えようとしていたことが看取できる。ここに、成熟した竹内自身の人間形成の一端を汲み取れる。

Ⅲ. 『長野県ホームヘルパー協会二十年史』への寄稿と各誌の編集業務

(1) 『長野県ホームヘルパー協会二十年史』への寄稿

ところで、戦後日本のホームヘルプ事業史を巡る先行研究においては、従来、上村(1997:247-57)、介護福祉学研究会(2002:35-7)、山田

(2005:178-98)、荏原(2008:1-11)らが指摘するように、ホームヘルプ事業の推進者としての竹内が著名だが、他方、人間的な成熟の兆しを見せていた70歳代頃の彼が、同事業といかに関わっていたのかまでは詳解されていなかった。そこで、1991(平成3)年7月31日の日誌を紐解くと、1991(平成3)年の未決事項として、①HH(ホームヘルプ)提出原稿の補強、②Q&A原稿の着手、③みつばさのもとにの訂正追加原稿作成、④2階窓の補修、⑤2階窓金網の補修、⑥庭の木の整理、⑦中間室の整理、⑧中座敷の整理、⑨奥座敷の整理、⑩雨排出の通路完備の10点が記述されている(日誌J:1991年7月31日)。この10点の記載順序と彼が考える優先順位とがリンクしているのか否かまでは定かではないものの、なかでも、もっとも注目されるのは、①の長野県ホームヘルパー協会20周年記念誌に掲載されたホームヘルプ事業に関する原稿の執筆についてである。

この執筆については彼自身、相当に苦心していたと考えられ、竹内は、「吾は6昼間にこもり、専ら依頼された事項や、事務的な整理にかかる。…(中略)…HH HomeHelper 制度(老人福祉法)以来20周年の記念誌の原稿の依頼を受け、その第1日の執筆にかかる」などと記述し(同:2月4日)、その2日後には、「夕刻までに記念誌とするHHの原稿を80%完結する。入浴する。久方なり。原稿の終末にどうしても主張せねばならないことを思い巡す。床の中である。静かな思いはすべて根底から客観視したい究極の思いである。思い巡す夜半の日は寒く曇飛ぶ」などと書き留めている(同:6日、傍点筆者)。

さらに、これだけに留まらず、執筆内容の推敲により一層努め、「県社協の協議結果によつての原稿の校正に当る」(同:20日)、「HH記念誌への展望についての原稿の構想を練る。妻の内職の仕事とは別に執筆に事を当てる」(同:10月23日)、「HH記念誌原稿のとりまとめに入る。終日これに当る」(同:24日)、「原稿完了、送付。小雨模様の朝、原稿をまとめる。24行×25字×20枚」(同:25日)、「20周年の記念誌原稿を吾が検証と

してのまとめを午前中に終了」などと連日のように認め（同：1993年10月9日）、ここから、彼の原稿執筆の過程が彷彿とされるとともに³⁾、このようなホームヘルプ事業史が主題となるなかで、同事業の再興を竹内自身も考案しようとしていたことが察知される。

ところで、上記傍点部に示唆した彼が論及した「原稿の終末にどうしても主張せねばならないこと」とは具体的にはいったい何だったのだろうか。転動を繰り返しつつも平坦ではない道りににおいて、必ずしも常時、ホームヘルプ事業に携わっていたわけではなかったこの頃の竹内が念願し続けていた帰着点とはどのようなものだったのか。その手がかりは、記念誌『長野県ホームヘルパー協会 20年のあゆみ』（第一印刷、1991a年）の14 - 29頁に掲載された竹内論文である「ホームヘルプ制度発足の周辺——素朴にあった上田の“ボランティアズム”」内に見出せる。その内容を見ていくと、ホームヘルパー像への模索と葛藤に関する具体的提言として、竹内自身、①在宅福祉と地域福祉に間にある、②一般性と専門性の間にあって、③制度とボランティアズムの間にあって、④社協機能と尖兵の立場にあって、⑤長寿社会創造のパイオニアとして、⑥その他の当面課題の周辺からの6点を論考した上で（竹内 1991a:22-7）、その最終文を以下のようにつまみ結んでおり、注目される。

ホームヘルプ機関誌の名称について、“輪”を主張したことを私は覚えている。その一つは、現場でホームヘルパーは“個”として懸命に努力する点である。点は点同志で慰め励まし合う“輪”という面が必要であると考えた。もう一つのことからは、現場には雑多なニーズが山積し、その一つひとつを解決するには、多くの人的社会資源（医療・保健・訓練・教育・心理・福祉などの人々）との連絡調整が必要であり、派遣家庭の家族との出会い、対象者との信頼関係にも心を費やさねばならない。ホームヘルパー自身以外の存在とのかかわりのなかに、心豊かな“輪”を拡げ、“和”を築いてほしいと思い巡した。つまり、矛盾や対立

する二つの概念を、両者を包含するより高い概念に統一し、発展させる“止揚”の思いを秘めつつ、主張したのである。ホームヘルパーに期待する私のその思いは、いまでも変わっていない。(竹内 1991a:27-8)

「輪」や「止揚」を強調しつつ、「ホームヘルパーに期待する私のその思いは、いまでも変わっていない」という文章に、竹内自身の堅固な思いが表れている。上記から、ホームヘルプ事業の進展を巡る議論の諸相のうち、有用と思われる論点を個別・具体的に論考する必要性を認識し、さらに、それらに共通することとして、個としての踏ん張りのみでは十分とは言えず、むしろ個々が輪をつくり、和むことを通じて一段高い次元へと仕事を押し上げることこそが重要であり、そうした組織的対応や柔軟な関係構築の意義を彼が主張しているところに、1990年代初めの竹内思想の大きな特徴の一つが窺える。

(2) 郷土史・宗教史への関心と学制的姿勢

上述の通り、多角的観点から、ホームヘルプ事業を含む民間社会福祉事業が改めて見直され、そこには人の輪(和)を基にした“止揚”の思いが重視されていたことを浮き彫りにしたが、その一方、竹内自身、生活に密着した活動を長年継続してきたことも見逃せず、その例として、郷土史・宗教史への関心の深化が挙げられる。具体的には、「郷土における宗教史的なことごとに関心を寄せる妻に過去のわが論文のことごとを語り合う。その関係資料に基く話題に日が開ける」(日誌J:1991年3月12日)、「妻は吾と共にあって郷土史的な視点で教会の歴史を学究していた。吾は農協からのアンケートに合わせて、これを記入し終る。整理の事務に終る。原稿に今日も手が出ない。新聞紙上にある重要記事に目をやりつつ、月刊専門誌、施設誌などに目を通す」(同:4月2日)、「第7回日本聖公会歴史研究者の集いに参加するためである。会場は愛知県犬山市サンパーク犬山である。…(中略)…合同問題の延長線上に婦人聖識問題があり、その

周辺に聖書理解と正しい教会のあり方に関する思考が正確に行われる必要を痛感する。わが席に当好し」などにそのことが窺え（同：1993年6月9日）⁴⁾、妻あきとの協働作業でもあったことが認識できる。

つまり、ここから多忙であった現職中には成し得なかった省察や展望に、夫婦ともに時間を充てており⁵⁾、このことがやがて、竹内自身が単なる社協職員とか一施設長という立場ではなく、一人の地元民として執筆活動や社会貢献活動へと尽力することにつながっていくことになる。

(3) 社会福祉法人小諸学舎理事長就任と故、花岡暉夫の理念

だが、こうした本当に自分がしたいことや追究したいものに着手し得たゆとりの時間は束の間であったと言え、竹内は、1991(平成3)年8月5日、社会福祉法人小諸学舎の理事長兼学舎長だった花岡暉夫の急逝に伴い、急遽、同会理事長に就任することとなる。着任に際し、竹内は「もとより、わたくしどもは微力な者ではありますが、前任者花岡暉夫がその生涯をかけて愛してやまなかった当施設を利用する人たちのために、わたくしどもも、みなさまのご教示をいただいて、誠実にその努め(ママ)を果たしたく願うものであります」などと挨拶し(竹内 1991b:挨拶文)、速やかに現場復帰を果たすとともに、知的障害者福祉分野での職責を果たす決意をする。とりわけ、以下の文章に前任者、花岡の思慮や理念の継承に努めようとする竹内の内面が看取できる。

故花岡暉夫学舎長兼理事長起案による「設立趣意書並びに基本構想試案」を拝読すると冒頭に新約聖書マタイによる福音書18章14節が引用されている——“そのように、これらいと小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではない” 人間の生命と人格は、その尊厳において万人平等である。たとえ頭脳、身体器官、精神に障害をもつ人といえども、その生存、教育、労働に対する固有の諸権利は等しく保有する——と主張している。そして、この目的達成のた

めに「われわれは、知能が重く遅滞しているこれらの青少年と共に生活し、その思考する内面の無言の叫びを聴き、その美しきものを求める無声の欲求を発見して、教育と医療と労働と憩いの場の交りの中で、その人権を守り、その全人間的発達を支援しようとする。このために学舎を建設し、経営する事業母体として社会福祉法人を設立」と、重々しく謳いあげている。(竹内 1997: 発刊に思うことごと、傍点筆者)

つまり、上記の「人間の生命と人格は、その尊厳において万人平等である」に同会の基本理念と設立・運営の方針を看取でき、さらに「重々しく謳いあげている」という彼自身の文言に、この記述内容を彼自身も重く受け止め、その志を全うしなければならないという竹内の使命感を読み取れる。

(4) 執筆活動の重点化と『山田分館報』編集

こうした急展開によって突如巡って来た重責に、竹内自身も少なからず苦慮した面があったと考えられるが、その一方で、職務を離れた日常では、彼は執筆に力を入れていた。竹内日誌が示唆するように、地元である同市上山田において彼は何を思索しながら、いかなる生活を送っていたのだろうか。改めて、日誌の記述を紐解いてみると、「自家にこもり原稿整理に当る。宝池住吉寮広報すみよしに掲載される原稿、“求められる自己像～専門職とは”に接近する思いを求めるままに記載した。昼間の大部分をこれに費やした。夕刻になって始めて外に出て庭草の手入れをする。夜は11時までじっくりと6月号の一羔ニュースに集中する」(日誌J: 1993年6月1日)、「社会福祉施設士あての原稿のまとめにあたる」(同: 1991年4月30日)、「一羔会の小山さんが久しぶりですねと云われた。ほんとうにそうであるように思う。午前には故花岡暉夫氏の遺稿集についての専門委員会が開かれ、午後は学舎検討委員会が開催され、理事宮本節子、小林正樹両氏も参加する。提案事項はどしどし提言しました所見を述べる」(同:

1992年9月16日)、「福祉士」月刊誌に掲載原稿を投稿する。速やかなる対応は、それだけの構想と資料の準備があったからのこと」(同：1993年12月14日)、「寒い一日を朝からこもって執筆。原稿山田分館報の執筆に集中する。夕刻まで概要を示す広報記事にとりかかる。大体がそろった」(同：3月2日)、「宿泊を終えて、地元の山田分館報のレイアウトに終日を使用、完結を急ぐ。夕刻18:50塩田町に向う。公民館で青少年育成講座に出席のためである」(同：12日)、「終日一步も外に出ずに山田分館報の編集とレイアウト作業に集中してとりかかる。整理作業と併行して作業を進める」(同：5月22日)、「夜0時40分まで山田分館報をつづる。レイアウトする。完了したのが、終日を要してこの時間となる。…(中略)…原稿は20周年誌やこの分館報、一羔ニュースなど、次から次へと来る。その対応に心をつぶすが、外の仕事は出来ず」などと記され(同：8月31日)、彼はこれまで以上に原稿執筆や編集作業に力を入れていたことが分かる。

ここから、『広報すみよし』『福祉施設士』『山田分館報』『一羔ニュース』など、メディア媒体は様々だが、こうした一人では手に負えない一連の執筆活動や編集作業を通じ、地元住民と竹内との関係性が問い直されていた時期ともいえ、彼自身の生活構造にも変化をもたらしていたことが考究できる。

(5) 『一羔^{いちこう}ニュース』のとりまとめ

このようななか、とりわけ、竹内が重点を置いていたのが、『一羔ニュース』のとりまとめであった。“一羔”とは、一匹の子羊のことであるが、この言葉と小諸学舎の変遷とは関連が深く、1970(昭和45)年11月に、活動母体として財団法人一羔会が設立されたことを起点とし、翌1971(昭和46)年10月に社会福祉法人小諸学舎の設立に至っていることから、同系列の組織であったと認められる。それでは、この時の竹内の編集・統括の活躍ぶりの一端を以下に見てみよう⁶⁾。

「一羔会創立 20 年の集い」に参席するために出向く」(1991 年 3 月 21 日)、「午前中に一羔ニュースの 2 回分原稿に入る。構想をまとめる」(同年 10 月 9 日)、「ゆっくり休養して一羔 News にかかる。とにかくにも晴天の暑さの中で部屋を開けて空気を流す。あとは専ら news 原稿に追われる」(1992 年 6 月 4 日)、「一羔ニュースの概要の企画と原稿執筆にかかる。それと共に、精米もち米持参と受持のため時間帯がうまく行かず、主日礼拝を休む」(同年 11 月 29 日)、「次から次への事務は、いよいよ一羔ニュースの原稿のまとめに入る。家庭では、公民館活動、振興会活動に追われ、その整理や企画に奔走される。精いっぱいである。学舎に来ては、当面ニュースの編集と MRSA 対策に合わせてその職員教育や、父兄への理解認識、更に山口 case への対応。経済を含めての配慮として共済互助制度の展望等。とにかく至急業務としての一羔ニュース編集に力を注ぐ」(1993 年 7 月 1 日)、「終日一羔ニュースのための原稿を取り入れる」(同年 11 月 3 日)(日誌 J: 1991 年 3 月 21 日～1993 年 11 月 3 日)

つまり、上記から、彼は単に原稿を執筆していただいただけではなく、世相や社会情勢、さらには社会福祉の動向なども考案しつつ、読者にとって有益な情報源となるように常々思考し、その理解の深化に左右し兼ねない編集業務にも熱を入れており、いわばある種の統括者としての位置づけが前面に出されるようになっていたと言っても過言ではなかった。

IV. 講演活動と関東ブロック研究会への参加

(1) 竹内による講演と「眞のボランティア活動」

一方、講演活動にも勤しんでいたこの頃の竹内も注目に値する。例えば、1990(平成 2)年 2 月 14 日には、上小合同庁舎で開催された同地区民生児童委員研修会で、講演している。ここでは、「福祉の心=静かな心くばりとみずみずしく造り出す力を求めて=」と題する内容を報告しており、

「190名の民生児童委員に語りかけようとしているとき、荻原家の長女（現在滋野にとつぎ民生委員を担当）がこそこそ吾をたずね来り、相互につもる話は別として親しくあいさつを交す。驚き入った。かつて東部町の婦人学級に講演したとき、やはりこのようなことがあったように思う」などと（日誌I：1990年2月14日）、講演の手応えもさることながら、人との出会いを通じて、回顧の念を催している。

他方、市老人大学（老人学園と呼称）において、「眞の Volunteer 活動とは」と題する講義を担当した竹内は、「仏陀の歩みやキリスト誕生の事実を思い起しつつ人生の生きることの尊さを基点にすえて Volunteer という原点を探究するような語りかたを行った。講義を受ける中に保健婦（上田保健所）が含まれていたり、公衆衛生学院で教育した保健婦や、長大で地域福祉論を教育した学生などが会場である老人福祉センターにあり、語り合う嬉しい時間をもつ」と記述し（日誌J：1991年1月24日⁷⁾）、この他にも、「上田市の高齢者学園での講師として定年の如く出向く。主題は、“眞の Volunteer 活動とは”と位置づけられている。参加者は74名、2学年の最終講義であるという」（同：2月6日）、「長野県老人大学佐久学部第2学年対象に“高齢者と Volunteer 活動”について講演する」などと（同：11月4日）、講演を重ねており、これら一連の記述から、彼の講演の中心的枠組みがボランティア活動の考察にあったと認識できる。枝葉末節までは窺い知れないが、竹内が長年培ってきた経験や熟慮・考察といったものが、一般聴衆という対者に対し、直接訴え得る機会を得ていたことは、彼自身にとっても大きいことであった。

（2）職員会議における問題把握と関東ブロック研究会への参加

既述の如く、編集作業や講演活動に余念がなかった竹内は、その一方、こうした経験から、自己反省を促す機会を得ていたこともまた座視できない。ここでは、竹内自身が考える自己の課題や人々にとっての要諦として認識されていたことを明確にすることが重要である。なかでも、1990（平

成2)年8月1日に行われた職員会議内での関東ブロック研究会報告が注目され、日誌を紐解くと、以下のように問答形式で記されている。

指導員：時間単位におむつ交換する「ちいさがたの家」の処遇論は何のためか

所長：定時排泄ということだけでなく、それには離床効果や体位変換を含めてリハビリとしてとらえているのでないか(自己回答)

事務長：おむつをしていく前提で考えれば自律する力をそこなう方法論でないか、トイレ誘導の方が原則ではないか

竹内：caseによって自律効果を促進できない対象もあり、おむつを使用せざるを得ないcaseが当然に出て来る。その点の区分と時間的に変化し流動的事項であるだけに、最善を尽くしての対応という姿を注目しなくてはならないのでないか(自己回答)
(日誌I：1990年8月1日)

加えて、自己補足の発言として、注目すべき事柄に、「注目すべきは『ちいさがたの家』が一時間交換おむつ方式をとらえたのに約1年間を費やしたということ(視点)。その時間は職員集団がすべて町内居住者でありMeetingしやすい環境にあったこと、又、上司の指示により行動したのではなく、職員集団のhearingを積み上げて決裁された手法であることに注目したい(視点)」などを挙げ、これらを踏まえ、竹内は自分なりに省察する。具体的には、「①上司(自己をも含む)相互の討論に終わっているのでないか、②主体的には特に寮母間の討論が充実することが重要だったのでないか、③以上のことから寮母間の発言があった後に助言的な発言として補足した方が好ましかったのでないかと推考されること」の3点を反省点として見出し(同)⁸⁾、ここから現場の人々の声をより大切に取り扱わなければならないと認識できる。また、2週間後の職員会議でも次のような議論があったと詳述され、現場レベルでのいねいな問題把握に努

めようとしている。

予定通りの職員会議の席上、司会担当の下村寮母から昨日までの所長意見と違った指示が出ていて大いに迷う。宮原寮母の素朴で純粋の努力の結果としての長谷川式知能テスト結果とその作業要領に関する報告を基礎としてそれを図表に計数整理して職員に報告了解を求める。そのことを作業療法としてのおむつ作業の関連とを調べての結果であることを告げる。更に作業手順がどう展開するかを説明。具体的実践と理論とを含めての整理をし、職員のレベルアップに供するための意図的説明を試みた。何か皆んな驚いていた。所長は資料をむさぼるように求め、事務長は“線”とした対象者を集団として面にする配置をすれば、一定の作業ができるかと質問してきた。恐らくは可能であろうが、この試みはあくまでも一つのモデルとしてまとめてみたものである。このような配慮や体験を中心に更に豊かな試みが展開され、具体的援助や処遇の上に役立つことを期待したいとした。寮母たちはこの事例は学祭に発表したらどうかと進言する。若い寮母さん達は、関心を高め、その発想の仕方を大いに語り合っていた。担当の寮母宮原さんは、感謝の気持を吾に表現していた。西寮関係担当。南寮関係担当。東寮関係担当それぞれの意慾を刺戟し、話題が広まる。……（同：15日）

次いで、翌年にも参加した関東ブロックセミナー〔日本施設士会、於五反田ゆうぼうと（簡易保険会館）〕でも、「TQCとして福祉領域に活用しようとする人材が多数生まれている現状報告があった。また、小島せつ子（都社協地域福祉部長）の施設と社協との関係協議については、都独特の民度や文化のあることが主張の中に浮かんで来た。あとの懇親宴会は予想の通りであり、楽しくする場面ただそれだけの場面であった。迫田園長に会館に落合い近況報告を受ける。スウェーデンストックホルムに2週間の旅行にて大いに学んで来たことを識る。開拓的創造的行為に感銘深く聞

き入る。更に宮本節子(全社協研修部長)にTELで打合、学舎選挙について所見を交流する」などと記し(日誌J:1991年9月26日、丸括弧内ママ)、交流を深めようと努めており、ここにも視野を拡げ、知見を深めようとする彼の姿勢が汲み取れる。

(3) 日本福祉施設士県支部総会と第3回社会福祉トップセミナー

1991(平成3)年4月20日、日本ソーシャルワーカー協会総会に参加した竹内は、「早朝一番の電車で上京する。日本SocialWorker協会総会の日である。組織機能の上で、多くの問題をかかえた時のように思う。それに親愛なる阿部志郎会長の苦境を察してのこともあって出向くことにした。シンポジウム“保健・福祉マンパワー対策を考える”にあっても、学びとるところ人の数より質より、その技術向上より思想の展開に思いをはせる重要性を感じず。又長野市の市吏員なみの人件費確保の課題と基本的意識改革への展望とは別途に考究するところと思考される。また子どもの権利宣言の批准など、地域からのActionの重要性を思う」などと論じ(同:4月20日)、福祉人材の質的側面や技術的な工場の意義を再確認している。

一方、その2日後には、「10時から日本福祉施設士会県支部総会が再度開催される。長野県から変革せねばならぬ主張を大いに力説。現状での問題提起と組織化について討議を加える。役員改選について現業者が、就任することの適切さを主張。静山荘の山村氏に新任してもらい副会長に下平氏を選び、会計に円満寺の北村を担当と決定する。事業計画①マンパワーの組織化、②市町村段階での総合的実践、③子どもの権利宣言への批准促進、④事務局、県社協事務局の合体化、⑤退会者の大林養成センターへの登録、などが論ぜられた。勉強の必要性を思う。車中に眠る。在宅福祉の本(3,000円)を求めて帰る」などと(同:22日)、再三にわたる総会での現状把握や課題認識に努めている。

さらに、1991(平成3)年5月29日には、第3回社会福祉トップセミナーに参加した竹内は、「早朝6時に出発。上野へ9時30分到着。定刻を遅れ

て全社協ホールに到着。全社協主催、厚生省後援の事。主点はマンパワー対策のあり方と老人保健福祉計画の策定である。吾は行政関係者の多く参加する planning 分科会に入り、シンポジウムを聞く。主体性を住民が置かねば先取りしても必ず後戻りすることの認識のないことを痛感する。12名の県内参加者である。塩川哲氏と共に列車に同席して帰途につく。計画する図書館の早期完成がいよいよ急を得たれるもの心思うことしきり。電車で八木沢から夜道をたどる」などと記述し（同：5月29日）、「住民の主体性」を鍵概念としつつ、行政関係者の発言などから、少なからぬ問題を把握し、解釈の方向性までは見出せないものの、さらなる議論の布石とするべく思案する。

他方、大学講義の受講に関しては、「第2日の講義は、吾が知人の重田信一教授と大橋謙策教授である。重田さんはたしかに老化した印象強く、それだけにこだわりも多い。その処遇論もやはり古めかしい印象を受ける。大橋氏は、やはり社会教育の領域から入っている視点だけに若いセンスと迫力があつた。貴重な指導内容として受け止めることが出来た。ことに地域福祉と市町村単位の領域での協働とその基本体制に関する視点が明確であり、大いに意をひるがえされた。二人と低額なる志那そば焼き飯を夕食として帰る。昼食は宮本理事と学舎の課題を語り合う」などと具体的に記し（同：1992年2月26日）、翌日にも、「起床は8時10分だった。二人（塩川哲氏と共に）とも慌てて起き出でる。第3日の研修日に参加する。今朝は朝食抜きで新橋から歩く。間に合う。今日は精薄、身障、救護などの対象者の分散会様式で会議が進行する。大正大学教授井沢清司氏を中心に討議が進行する。この間、宮本節子副部長と共に学舎の当面する課題についての協議。また力丸徳子めぐみ group 施設長の名刺交換と資料依頼。泉亮氏との出会い（神愛修女会理事）などが抗議の中間であつた。一人のまとめや、日誌の記録のために霞ヶ関ビルにコーヒーでこもる」などと（同：27日）、一定の成果があつたことを匂わせている。

V. 71歳の誕生日と竹内の苦悩

ここまで執筆活動や総会・研究会への参加などを中心に、彼の思考や認識を見てきたが、ところで、通常、70歳を超えた竹内に関する史資料は、調査・整理の緒についたばかりである。残存史料の整理整頓や内容吟味は慎重かつ手堅く行わなければならない、特に平凡な日常の記録のなかから、彼独自の熟思や見解がないかと探究することも重要となる。そこで、日誌の記述に目を遣ると、「久方にあたたかい一日となった。日中もよく晴れ上る。いい日和となる。食事をするとなぐに眠気を催すことになる。努力しないとあまりにもめぐまれた環境に陥ることを恐れる。内職に励む妻に併行して、吾はそのなすべきことを推進しつつ、今日一日の計画に着々に進める。…(中略)…妻、日赤OBのgroupの集会のため午後から別所斎藤旅館に泊る。たのしらしく無理して事をすすめるのが手に取るように解る。吾一人なり」などと(日誌J:1991年2月26日)、一人の時間を大切にしているのが窺え⁹⁾、ここから、自省や回想を基に、職務や日々の生活を見直そうとしているのが分かる。

その一方、小諸学舎理事長としての立場からは、「夕刻の出勤をする。朝礼の中で社会福祉士、介護福祉士の公的ライセンスについて積極的促進を主張。職員間では若干多くの抵抗があったように見える。学舎長との法人展望について基本的に考想の異なるを痛感する。吾にとっては仕事の上の抵抗に見える。また、午後になって花岡夫人来訪。永田顧問の配慮について複雑きわまる感情のズレを見て、静観するを待つこととする。未亡人という立場での複雑な思いに苦汁をなめた一日となる。この間の舎生のすなおさに救われる」などに(同:1992年10月26日)、管理者としての彼なりの苦悩が見られ、ここでも意見調整やさらなる議論の必要性が示唆される¹⁰⁾。

他方、「10:30頃の出勤。正味は昼休みなしの一羔ニュース作成の時間となる。学舎長はどこからともなく帰舎する。学舎長への対応とそのかわりの諸点に心を砕く。何を考えているのか、解らない存在でもあり、情報

が入らない」などと（同：12月4日）、職務上の疑念を抱きつつ、「こわいのは、一種の淋しさにも通ずるところでもある。何か空白感もあり、孤独さもあって淋しく一人語るのが、一番心安まるようにも思う。友人達との出会いはいいが、繁忙のなかの時間的やりくり、更に公的業務に併行しての地域的配慮など。その上の私的かかわりの終ったあとは、その繁忙極に達する。吾の忘れものと同様に妻も電気のつけ放しが目立つようになる。淋しい老後の現実か」などと記し（同：1993年8月24日）、自らの老いを自覚し始めていたことが窺い知れる。

こうした自覚症状のなか、竹内は、実家、花里家に関する記念誌の作成にも着手し始め¹¹⁾、「この合間を縫っての亡母のクジャク刺繍の photo 撮影に兄来る。父母の思い出記を編集するためのものである。9:30～11:00 この間の準備のため亡父の文字や妹たちの佐久の祖父母に送った書ぞめなど、又はる枝の絵がでてきた。吾がはる枝を中心に画いた綴りは、吾が責任においてまとめ上げねばならない」などと記す（同：9月10日）。なお、この記念誌は、のちに彼の義弟、宮坂亮一が編者となり、発行人は実兄の花里吉見が務めるという形で、『以和為貴——花里家の記録』（1993年）としてまとめられ、竹内の思想史研究を方向づける羅針儀の一つとして、貴重な第一次史料となったものである。

VI. まとめ

最後に、以上で論じてきた社会福祉法人神愛会退職前後における竹内吉正の執筆活動や自省への着目から、ホームヘルプ事業史のゆくえんに関わって検討すべき点を考察する。

Ⅱ章では、神愛会事務長としての職務上の達成感と限界の双方を認識していた竹内が、同会からの即時退去に苦悩しつつも、旧来、尽力してきたホームヘルプ事業に加え、特定有料老人ホームや地域交流ホームの新改築などの必要性から、その経営面に力を降り注ぎ、このことが結果的に、従来、ホームヘルプの対象にならなかった層や、富裕層であっても施設利用

した人々、さらには孤立・孤独問題に直面しがちな人々への予防的措置として、具体策の実現に画策し、安全網の構築に寄与していたことを示唆した。

次いで、Ⅲ章では、「ホームヘルプ制度発足の周辺——素朴にあった上田の“ボランティアズム”」と題した、長野県ホームヘルパー協会二十周年記念誌への寄稿において、竹内（1974:51-69）の単なる転載ではなく、「原稿の終末にどうしても主張せねばならないこと」と記したように（日誌J：1991年2月6日）、竹内は文章の完結にとことん拘り、熟慮を重ね、ホームヘルパー像への6つの具体的提言ののちに、「点は点同志で慰め励まし合う“輪”という面が必要であると考えた。…（中略）…ホームヘルパー自身以外の存在とのかかわりのなかに、心豊かな“輪”を拡げ、“和”を築いてほしいと思い巡した。つまり、矛盾や対立する二つの概念を、両者を包含するより高い概念に統一し、発展させる“止揚”の思いを秘めつつ、主張したのである。ホームヘルパーに期待する私のその思いは、いまでも変わっていない。」などと（竹内 1991:27-8）、新たに書き下ろししていたことはとりわけ注目された。ここから、個への追求に終始せず、個々が心豊かに輪をつくり、拡げ、“和”となることを念願していた彼の心情を看取でき、この姿勢は、竹内自身が郷土史・宗教史などの歴史研究並びに『山田分館報』・『一羔ニュース』の編集業務などを遂行する上でも重視されており、ここに、竹内において、ホームヘルプ事業関係者のみならず、人間関係や物事を見る視野を拡げつつ、対等な目線で、地元住民や一般市民とのかかわり方が改めて問い直されようとしていたことが認識できる。逆説的に言えば、ホームヘルプ事業を始めとする諸々の民間社会福祉事業の推進においては、当該事業の直接的な関係者による関与のみでは不十分であり、そこにいかに不特定多数の人々を一人でも多く巻き込めるかが鍵となり、このことを念頭に、竹内はこうした地道な仕事に励んでいたと換言できる。

一方、Ⅳ章では、「眞のボランティア活動とは」などと題する講演活動

を中心に、民生児童委員研修会や市老人大学（老人学園、高齢者学級）で講師として活躍する一方、職員会議内においても関東ブロック研究会の成果を周知したり、日本福祉施設士県支部会総会や第3回社会福祉トップセミナーにも意欲的に参加するなど、自身の知見や力能において、一定場所に留まるのではなく、常に刷新し、良いものを摂取しようと努める彼の態度が解読できた。このことは、ホームヘルプ事業のみならず、1991（平成3）年8月5日から就任した社会福祉法人小諸学舎理事長という立場から、知的障害者福祉分野における職務上にも通ずることと認識していたことを跡付けた。もっとも、彼にとって新たな領域での躍進において、これまでのホームヘルプ関係の業務で培った人間関係や業務能力が少なからず影響していたことは言うまでもないだろう。また、古希を迎え、自らも“老い”を自覚し始めていた竹内にとって、自立支援や保護という概念への理解の深化がより一層求められ、このことがホームヘルプ事業のゆくえに関わって早急にとり組むべき課題の析出へとつながっていたことをV章で論じた。

末尾にあたり、今後は、1994（平成6）年～1998（平成10）年頃の竹内の目標や職務を追究することと、小諸学舎理事長としての彼の奮闘や役割を具体的に明らかにすることを研究課題としたい¹²⁾。

注

- 1) 1990(平成2)年1月20日の竹内日誌には、「曇時々雪模様の日である。冷気に染む。朝から須坂福祉事務所担当 case につき調査報告をまとめる。これを殆んど吾が力で作成、完了する。重要な所長意見欄には案ずるように所長は歯が立たず、その論理性の欠如が明らかになるが故に好んで試案を完了の思いで記入する。それを躊躇しつつ所長は添削しているようである。これも良しとして“和而不同”の思いでいる。結局は最終バスで帰宅。まつ妻と、ゆったり楽しい食事をする。よし。ゆったりとテレビの鑑賞に身体をいやす。外は寒く、家内は床暖房に委ねる」などと記され(日誌I:1990年1月20日)、相変わらず煩雑な職務に従事していたことが窺える。
- 2) 例えば、竹内は「吾は長野伝道区合同礼拝。研修会に参加のため松本聖十字教会へ。妻は主日礼拝にて、上田聖ミカエル及び諸天使教会へ。林宏三郎司祭の司式による礼拝に参加。松本では平安女学院チャプレン司祭パウロ松本正俊師の司式によってリードされた『礼拝と音楽の関わりについて』の講話を中心に進行。礼拝への祈りと音楽との関係や、その聖書福音的な意味などが語られた。この間の空白と時間静けさを心よく説かれた。いい集会であった。カンボジアでは注目を世界から受けていよいよ選挙に入る」などと記し(日誌J:1993年5月23日)、教会活動にも熱を入れている。
- 3) その一方、「曇後雨模様の梅雨の日。ホームヘルパーの mermaid group への事後報告や記録の送付を完了して、午後には篠ノ井市民会館での県福祉施設士会総会に出向く。事務やとしての下平会長には理論的リーダーシップは期待できないことは明白。しかしその誠実さだけが光る」などと(日誌J:1993年6月26日)、北欧視察を伴にしたマーメイド会員たちとの交流を続けていることを示唆している。
- 4) この他にも、「今夕 20:00 歴史と教育を考える集いがあるので積極的に参加した。儀雄、周、菊雄なる人材が集っていた。わが立場は地権者という立場とは別に住民の一人として集いに参加。その賛成反対の議に加わるのではなく基本問題を大いに自由に語り明かそうという姿勢であった。23:30 まで互い

に大いに論ずる。論点は、①圃場整備中心地の設置は、税金の無駄遣い、②山田の適地とは異にし、手塚の立地拡張はいかに、③教育学級制の是非について論議が積重ねられず、④これらの意見を大いに西塩田住民は考究されたい」との記述もあり（日誌J：1991年5月13日）、竹内の身近な生活の場での論議が盛んに行われていたことが窺える。

- 5) 「今朝はいつもより寒く6時半頃から雪が降り始めいまサンサンと降っています。今年初めての雪です。豆はたきも終わったので安心してます。歴史の資料を送ります。あしあとの章とあかしの章と年譜昭和15年までお願いします。私が昭和16年～おわり迄と受聖さん者の推移とその名簿をやらせていただきます。再々校正の綴り方を見ると目次の内容と違うようですが、年譜が一番後ろがいい様ですね。目次の内容を変える方がいいのではないかと私は思いますが、どうでしょうか。それから、六とか七とか番号のついた項目があちこちに入っています。順序から見るとかしい様な気がします。考えて見て下さい。お仕事が沢山あるのに御苦労様です。体を気をつけて下さい。それではまた。昭和63年12月17日あさ8時 あき お父さんへ」という妻あきの手紙文にも（日誌I：1988年12月17日）、両者の協力ぶりが具体的に看取できる。
- 6) その一方、一羔会創立20周年記念大会に出席した竹内は、「やや冷えを再び感ずる一日。“一羔会創立20年の集い”に参席するために出向く。学舎体育館に集合、約90名舎生も含めてのいい雰囲気か漂う集会だった。講演『福祉の夢、暮らしの夢』と題して、駒澤大学教授、永田幹夫氏の話であった。その内容は平凡であったが、1～2ヶ所ばかりの主張に注目した。“福祉”は生活であり、暮らしであるという視点であった。又医療、教育という一般化した課題にないのが実態であることへの問題提起であった」などと記し（日誌J：1991年3月21日）、生活（暮らし）と福祉という視点から考察を深めている。
- 7) なお、竹内が講演を行う際には、必ず事前準備を行い、例えば、「あすの講演（本年度最後のもの）の内容の検討とその原稿作成に当る。ほとんどの終日を之に当てる。太田司祭からすばらしい絵の描かれたはがき梅の便りがつく。心の通い合う便りに感動する（別添）。人と人との心のかかわりという姿をしみじみ

と覚える。人と人のかかわり、その人間としての生きざまに心を集中したい。その貴賤さをその大切さを無言の中に祈り求めたいと願う。あすの講義の中心もこれに外ならないと確認する」などにも(日誌J:1991年1月23日)、そうした裏事情を汲み取れる。

- 8)「晴、日中は相変わらずの猛暑、朝夕は冷える。物に心を込めて求める人々(物の心をつくる人)、人に心を込めて求める人々(人の心をつくる人)。ただ異なることは物は止めることが出来るが、人は止めることが出来ない。故に、盆休みもなく吾は出勤、電車だ」と述べた上で(日誌I:1990年8月13日)、竹内は、「①転倒の直後には、何もなかったように歩行するが、骨は折れて骨膜が縮むと当然に痛みを感じるし、動けなくなる。直後に何もなかったと云っても疑問だったはず。②脳細胞が侵されている知能障害、若干の言語障害のある対象に対してその問診だけで診断し、観察することは問題であり、いかに不安定なものかわからない。③1、2の障害のある対象者を、その告げられない痛みをそのまま代弁する立場が職員(寮母)であり、吾が立場であったはずであるのに、この点、疑問せねばならない」の3点を反省している(同)。
- 9)71回目の誕生日を迎えた竹内は、「71歳の誕生日である。朝から寒気を覚える日。9時から生活改善委員会の引継ぎに出席する。金井正氏正一氏と共に正衛氏から引き継ぐ。生活改善のための結婚式用具などが古式豊かにその多くが受け継がれていた。省略すべきは破棄すべきを思う。午後に妻と共に青年の個性豊かな“青年の主張”をテレビで見る。青年の姿のたくましさを感じる。最優秀賞に決まった“話して見ませんか”という韓国父子青年が云う対話への素朴な感動は注目された」と記述している(日誌J:1992年1月15日)。
- 10)「晴、公的用務で長野に出張。社会福祉法人役員研修会である。県社協では吉野君が中核になって実施していた。実に事務的に事を運んでいる姿が明らかで、その部長、局長なる立場の自信のなさが言葉の端々に見受けられる。倉島彦夫氏(しいのみ会理事)や川上淑江(博仁会理事)にあいさつを受ける。金子貞子さんにも駅頭に会し、相談を受ける。彼女からも大阪からの土産品を受ける。思い広げることの多い今日一日であった」などから(日誌J:1992年8

月 21 日、丸括弧内ママ)、この頃の竹内は、多様な人々との出会いを通じ、多くを感得しようとしている。

- 11) 「晴、暖かな一日、午前は室内、午後は老久総会。山田ことぶき会計画総会に夫婦ともども出席参加する。妻は会の婦人部長を担当、菊雄氏が会長、副会長(会計)が益人氏。金井好衛氏は高倉テルの教育を受けた青年時代の思い出を語る。又、民族戦争、宗教戦争のいま、宗教家、歴史研究者は何をなすべきかに論点がいく。佛教僧の思いを間接的に聞く。又、部落内統合小学校問題で円満解決の目途がついていないこと、その意識のズレのあることを知る。そのことは部落総会と家庭内年齢層の相互認識のズレが存在する結果からの課題であることを知る。公民館長及び振興会長としての意欲かりたてられる」などから(日誌 J: 1993 年 4 月 27 日)、大正デモクラシーの思想的影響や地元根差した幅広い活動に身を投じていたことが看取できる。
- 12) 家庭機能と家族のかかわりから、精薄更生施設(現、知的障害者更生施設)内における 2 事例を具体的に検討した竹内(1996a:15-20)なども注目される。

史料

- 宮坂亮一編(1993)『和を以て貴しと為す——花里家の記録』花里吉見。
- 竹内吉正(1988-1990)『3Year Desk Diary 1988-1990』(1988 年 1 月 1 日～1990 年 12 月 31 日、本稿では日誌 I とする)。
- 竹内吉正(1991-1993)『1991-1993 THREE YEARS DIARY』(1991 年 1 月 1 日～1993 年 12 月 31 日、本稿では日誌 J とする)。
- 竹内吉正(1991b)「無題」(1991 年 8 月 5 日、小諸学舎理事長就任の挨拶文)(花里吉見蔵)。

文献

- 阿部志郎(1997)『福祉の哲学』誠信書房。
- 荏原順子(2008)「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』(6),

1-11.

- 一番ヶ瀬康子 (1996) 『在宅介護入門』 労働旬報社.
- 花岡暉夫 (1994) 『野に咲け矢車草』 一羔会.
- 池田英俊・芹川博通・長谷川匡俊編 (1999) 『日本仏教福祉概論』 雄山閣出版.
- 浄土宗総合研究所仏教福祉研究会編 (2012) 『浄土宗の教えと福祉実践』 ノンブル社.
- 介護福祉学研究会監修 (2002) 『介護福祉学』 中央法規出版.
- 上村富江 (1997) 「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」 『社会福祉のなかのジェンダー』 ミネルヴァ書房, 247-57.
- 小林精子 (1999) 「訪問記 No.24 長野小諸学舎」 『知的障害福祉研究』 46(5),8-14.
- 小諸学舎 (2020) 「小諸学舎——学び・働き・生きる人々」 (<http://www.komorogakusha.jp/komorogakusha/komorogakusha.pdf> 2020年4月25日取得).
- 宮本節子 (2013) 『ソーシャルワーカーという仕事』 筑摩書房.
- 宮城洋一郎 (2013) 『宗教と福祉の歴史研究』 法蔵館.
- 森 幹郎 (1972) 「ホームヘルプサービス」 『季刊 社会保障研究』 8(2),31-9.
- (1974) 『ホームヘルパー』 日本生命済生会社会事業局.
- 長野県ホームヘルパー協会 (1991) 『長野県ホームヘルパー協会二十年のあゆみ』.
- 長野県社会福祉協議会 50年のあゆみ編集委員会編 (2003) 『長野県社会福祉協議会 50年のあゆみ』 長野県社会福祉協議会.
- 中寫 洋 (2010) 「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」 『日本の地域福祉』 (24), 71-83.
- (2012) 「竹内吉正における地域福祉論の形成過程と基礎構造」 『日本の地域福祉』 (25),75-85.
- (2013) 『日本における在宅介護福祉職形成史研究』 みらい.
- (2014a) 『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』 久美.
- 監修 (2014b) 『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭養護婦派遣事業——長野県上田市資料1』 近現代資料刊行会.
- (2019) 「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ——上田市

- 社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に」『社会福祉学』60(3),1-13.
- (2020)「竹内吉正による欧州ホームヘルパー活動事情視察の行程と成果」『中京大学大学院社会学研究科 社会学論集』(19),1-19.
- (2021)「竹内吉正による欧州ホームヘルパー活動事情視察(1971.11.4～20)とその影響の考察——1971年の記録物を中心とした実証的検討から」『介護福祉学』28(1),1-13.
- 二十五周年記念誌編集委員会編(1997)『創立二十五周年記念誌 自立をめざして』社会福祉法人小諸学舎.
- 日本仏教社会福祉学会編(2006)『仏教社会福祉辞典』法藏館.
- 日本基督教社会福祉学会・日本基督教社会事業同盟編(1978)『キリスト教社会福祉概説』日本基督教団出版局.
- 日本キリスト教社会福祉学会編(2014)『日本キリスト教社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房.
- 日本聖公会中部教区婦人会編(2014)『日本聖公会中部教区婦人会30年のあゆみ』日本聖公会中部教区婦人会.
- 大橋謙策(2022)『地域福祉とは何か』中央法規出版.
- 重田信一(1986)『社会福祉の方法』川島書店.
- ・三和 治(1989)『社会福祉』メヂカルフレンド社.
- 神愛修女会(1994)『神愛修女会のあゆみ』神愛修女会.
- 須加美明(1996)「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会関係研究』2(1),87-122.
- 竹内吉正(1974)「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」『老人福祉』(46), 51-69.
- (1991a)「ホームヘルプ制度発足の周辺」『長野県ホームヘルパー協会20年のあゆみ』第一印刷, 14-29.
- (1996a)「家庭機能・家族とのかかわり——精薄更生施設における事例を基礎として」『月刊 福祉施設士』(172),15-20.
- (1996b)「施設訪問記 神愛会を訪ねて」『月刊 福祉施設士』(173), 16-8.

——— (1997)「発刊に思うことごと」『創立二十五周年記念誌 自立をめざして』

社会福祉法人小諸学舎.

和歌山県社会福祉協議会編 (2015)『社会福祉法人和歌山県社会福祉協議会 法人設立 60 周年記念誌 1955 ～ 2015』和歌山県社会福祉協議会.

山田知子 (2005)「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大學研究紀要 人間学部・文学部』(90), 178-98.

吉田久一 (2003)『社会福祉と日本の宗教思想』勁草書房.

全国社会福祉協議会九十年通史編纂委員会編 (2003)『慈善から福祉へ 全国社会福祉協議会九十年通史』全国社会福祉協議会.

全国社会福祉協議会編 (2010)『全国社会福祉協議会百年史』全国社会福祉協議会.